

テーマ別発表 **3**

「南アジア」の「労働移動」 で採択された「ニーズ対応 型地域研究」を考える

趣旨と全体的報告

山本真弓

平成19年度に山口大学が2年間の予定で採択された「ニーズ対応型地域研究推進事業」のテーマは、「バングラデシュの社会経済的格差と労働移動に関する実証的研究」(代表者・山本真弓)というものであったが、プロジェクト採択直後に代表者の交替があり、研究計画を精査した結果、特にバングラデシュ農村部から日本への移動に焦点を当てることになった。

成果としては、ひとつは、1990年以降に新たに村人を日本へ送り出すようになった村に注目しその背景を分析したことで、もうひとつは、80年代の渡航者の一部定住化傾向とその実態を明らかにしたことである。さらに、「ニーズ対応型地域研究推進事業」のスキームが研究者に具体的な政策提言を求めていることから、調査内容全体を近年の日本の移民政策をめぐる議論と絡めることにした。その際、韓国の移民政策を比較の対象として、在韓バングラデシュ人労働者についても若干の検討を行った。

したがって、プロジェクト全体の構成としては、①荒木一視氏と山本が行った4村の農村世帯調査を土台に、②80年代と90年代の出稼ぎの変化に注目するべく、聞き取り調査を行った(高田峰夫・山本)。③定住化傾向の実態分析としては、ベンガル語エスニックマガジンの分析(高田)、④在日バングラデシュ人聞き取り調査(稲葉奈々子)を行った。さらに、⑤韓国のバングラデシュ人労働者の実態を日本のそれと比較するべく考察した(三宅博之)。これらのうち、本セッションでは、①、②、③と⑤の報告が行われた。以下、それぞれの報告を要約して紹介する。

まず、荒木氏による「バングラデシュにおける人口移動と社会階層—農村

部から日本への出稼ぎ労働者を中心に」と題された報告では、三宅／長谷、稲葉／樋口によって過去に行われた在日バングラデシュ労働者の実態調査の成果を踏まえつつ、特に送り出し地域の農村に焦点を当てた農村世帯調査の分析結果が示された。これは、1980年代から日本への出稼ぎ労働者を出している2村と、査免停止（1989年）以後の1990年代から日本行きが見られるようになった1村、および日本への出稼ぎ労働者がいない1村の計4村（1369世帯／7998人）で、調査票を使って、移民を出している世帯と出していない世帯それぞれについての家族構成、職業、教育、所得、財産等をバングラデシュ農村における国際労働力移動の一般的特質および社会経済的格差と関連づけて明らかにしたものである。4村のうち、日本への出稼ぎ労働者を出している3村については、家族と帰国者への聞き取り調査も補足的に行った。なお、聞き取り調査は高田氏が報告し、一部山本が付け加えた。以下、明らかになった点を箇条書きする。

- ・ 家族を外国へ出稼ぎに送るのは、貧困世帯ではない。これは、外国で働くこと自体、ある程度の資金を必要とするためである。
- ・ 外国からの仕送りが家計に占める比率は大きく、村の経済階層で上位を占めるのは、外国送金のある世帯である。
- ・ 出稼ぎ労働者は村全体の学歴水準から言えば高い教育水準にある。
- ・ 日本への出稼ぎ世帯は、サウジアラビア（中東）への出稼ぎ世帯よりも社会階層が高い。
- ・ 1980年代から日本への出稼ぎを出している村では、韓国への出稼ぎもほぼ同じ程度に見られる（以上、農村世帯調査より）。
- ・ バングラデシュの一部の地域や特定の村落においては、兄弟や親せきの中の多数が滞日経験をもっている例が散見され、そのような場合、渡航の資金ならびに手続き等で、相互扶助がある。
- ・ これら相互扶助の延長上にバングラデシュ側で語学校（日本語学校）が設立される。
- ・ 語学校は、日本の日本語学校へ入る準備、いわば日本語予備校となっており、日本の日本語学校へ入学する手続きの指導、代行を行う、一種のエージェントとしての側面をもつ。
- ・ 日本への渡航時期が査免停止の前か後かで帰国者の使用する（獲得した）日本語が異なることから、両者の社会経済背景の違いが明らかになった。
- ・ 査免停止以後に新たに日本へ村人を多数送り出している村があり、そ

の背景には、安定した在留資格と生活基盤を築いた村出身の在日バングラデシュ人の存在が大きい。

- ・ 日本へ出稼ぎ労働者を出している村では、村人と日本人女性との結婚、離婚が多数見られる（以上、家族と帰国者への聞き取り調査より）。

つぎに、高田氏が「在日バングラデシュ人のエスニック・メディア―『ポロバシュ』を事例として―」と題した報告を行った。高田氏はベンガル語誌『ポロバシュ』を取り上げることで、在日バングラデシュ人社会におけるエスニック・メディアの持つ特性や、それが当該エスニック集団の意識をどのように反映しているかなどを明らかにした。個別に検討したのは『ポロバシュ』の第5巻2号（2007年6月発行）の表紙部分、表紙の裏、1ページ目（発行の詳細、編集記、目次）、2ページ目（緊急連絡先情報）で、このほか、3ページ目以降の「本文」相当部分（若干の日本語のページとベンガル語のページ）を、

- ・ 記事に関して、
- ・ 広告に関して、
- ・ エスニック・メディアとして、
- ・ フリーペーパーとして、

の4つの観点から分析考察した。

その結果、記事に関しては、一方では過剰なまでの自分たちを在日バングラデシュ人社会と故国バングラデシュへの関心集中、他方では、それと対照的なまでのホスト社会（＝日本）やホスト社会のマジョリティー（＝日本人）への無関心、という顕著な傾向が浮かび上がるとともに、広告に関しては、特に在日バングラデシュ人が同胞を顧客として出す広告の場合（大多数）では、在日同胞に対して「名前を売る」「存在誇示」が目的ではないかと考えられる例が多々あることが明らかになった。さらに、エスニック・メディアとしては、

- ・ 「エスニック言語メディア」的、
- ・ 「居住国産のエスニック・メディア」と「出自国メディア」のミックス的存在、

- ・ 「1世向け」、
- ・ 典型的に「短期滞在志向型」、
- ・ 「居住社会に関する無関心」が顕著、
- ・ 「本国志向」の強いエスニック・メディア

であることが「ポロバシュ」の大きな特徴として浮かび上がった。

最後に「フリーペーパー」としては、エスニック・メディアとしての特性ゆ

えに、フリーペーパー発行の主要条件を比較的容易に満たしており、形態としては「在日バングラデシュ人コミュニティ」をターゲットにした、「コミュニティマガジン」と「ターゲットマガジン」の両側面を持つフリーペーパーで、結局、『ポロバシュ』の場合、ある種の「同人誌的」発想がベースにあることが指摘できると結論づけた。

三宅氏による報告は、「韓国とバングラデシュ—韓国でのバングラデシュ人出稼ぎ労働者を取り巻く状況を中心に—」と題したもので、主に韓国のバングラデシュ人労働者の状況が写真で紹介され、外国人を支援しているキリスト教会内部の様子、バングラデシュ人同士の交流やバングラデシュの祝祭的行事の様子が示された。韓国では2002年あたりまでは入国管理局の摘発の数は少なかったが、2004年の雇用許可制度の実施とともに摘発頻度が多くなり、バングラデシュ人の人口が以前と比べて極端に少なくなると同時に、外出を控えるようになったのが特徴であると述べられた。韓国では、職場以外での韓国人とバングラデシュ人との接触・交流は最小限であることが指摘された。

セッションの最後には、山本が文科省との質疑応答を再現し、「ニーズ対応型地域研究」では極めて具体的な政策提言が求められたこと、それへの回答のひとつとして、オーソライズされた日本語教育の必要性を挙げたことを述べた。「ニーズ対応型地域研究推進事業」は各プロジェクトの終了後に文科省でヒアリングが行われ、予め提示された質問に対して、文科省から与えられたパワーポイントのフォーマットに則って回答するといったことが行われたため、本セッションでは、政策提言を前提にした地域研究の在り方についても議論をしたかったが、参加者の関心が報告の具体的な内容に集中したため、その部分についてのフロアーとの議論は残念ながら行われなかった。

やまもと まゆみ ●元山口大学人文学部准教授